



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## ドイツにおける地域に根付くスポーツフェライン (スポーツクラブ) 文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 淳哉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/00174103">http://hdl.handle.net/2309/00174103</a>

# ドイツにおける地域に根付く スポーツフェライン（スポーツクラブ）文化

前ハンブルグ日本人学校 教諭

埼玉県川口市立青木中学校 教諭 村上 淳 哉

キーワード：派遣国の社会、スポーツ文化、総合型スポーツクラブ、体育、部活動、スポーツライフ

## 1. はじめに

日本のスポーツ界及び体育科教育界は古くからドイツを参考にしている。近年日本でも欧米を参考に総合型地域スポーツクラブが取り上げられたり、学校指導要領に、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図ると取り上げられたりしている。

ドイツでは、スポーツをする際も観戦する際も、大人も子どもも共通してスポーツフェライン（Sportverein）と呼ばれる、いわゆるスポーツクラブを介して行われている。そこで、スポーツフェラインの取り組みや歴史を研究する事で、日本全体や帰国後に会う生徒のより豊かなスポーツライフの実現に向けてヒントにできかもしれないと考え、自分自身がハンブルクにある“ETV Hamburg（Eimsbütteler Turnverband e.V.）”というスポーツフェラインに加入した。ここにその概略を紹介したい。

## 2. ドイツのスポーツフェラインについて

### (1) ドイツ人のスポーツとの関わり

ドイツの人口は約8,000万人である。そのうち2,400万人もの人々がスポーツフェラインの会員となっている。人口に対する割合では3割にもおよぶ。ドイツでは1970年代から生涯スポーツが盛んになり、スポーツフェラインの数、会員数が急激に増加したようである。

ドイツにはスポーツクラブ文化が根付いており、大人も子どももスポーツフェラインとともにスポーツと触れ合うことで、スポーツ文化が成熟してきたといえる。日本では、学齢期の多くの子どもは、部活動を中心としてスポーツと関わっている。甲子園や箱根駅伝など多くの人々の関心を集めるスポーツイベントも部活動という構造の一部である。学齢期を終え部活動がなくなると、それまで学校を介して行っていたスポーツをする機会が減少する。すると、仲間探しや場所探し、スポーツに関する出費など、今まで学校を介する事でできていたことが、個人の負担となり、多くの人々にとってスポーツがハードルの高いものになってしまう。

スポーツを文化として成熟させていくには長い年月が必要であり、大人だけではなく子どもへの働きかけも必要である。子どもたちのスポーツとの関わりは、学校体育だけでなく、学校教育期に行われる運動部活動によるところも大きい。日本では、スポーツクラブでスポーツと関わる小中学生は少数である。しかし、日本でもスポーツクラブが発展する事は、日本のスポーツ文化を成熟させていくには必要な事だと考える。

### (2) スポーツフェラインとは

ドイツのスポーツクラブは、「フェライン（Verein）」と呼ばれる法人である。古くから「協会」「クラブ」といった定訳がある。私が加入したETVというクラブも、正式名はEimsbütteler Turnverband e.V.といい、e.V.がeingetragener Vereinの略で、社団法人を表している。日本の状況を鑑みるとNPO（特定非営利活動法人）と考えたほうが理解しやすい。組織形態からして、日本で想像されるスポーツクラブとは異なることがわかる。

日本でスポーツクラブといえば最新の運動機器が並び、機器の上を走ったり、筋力トレーニングをしたりするようなスポーツクラブを思い浮かべることが多いのではないだろうか。日本のそういったクラブの運営体は私企業で、利用者はその運営会社にお金を支払うという営利事業である。これはドイツのスポーツフェラインと全く

違う。

日本のスイミングクラブやテニスクラブというような単一種目を扱うフェラインは少数であり、ドイツでは、ひとつのスポーツフェラインで複数の種目を行っているところがほとんどである。しかし、スポーツフェラインの立ち上げ時は、単一種目の場合もある。

第2次世界大戦後、占領下のドイツでは、ナチス期から存続していたスポーツ組織が解体され、建国翌年の1950年に主に州スポーツ連盟と種目別競技連盟からなるドイツスポーツ連盟（Deutscher Sportbund:DSB）が組織されたのだが、戦前もスポーツクラブのような形態でスポーツが行われていた。スポーツとは言っても、日本で行われた戦前の体育と同様に、強国をつくるための強靱な精神と体をつくるために、徒手体操のようなものが行われる事が多かったようである。そのような体操教室のようなクラブが発端となり、種目数を増やしなが大きなフェラインに成長していった。

ドイツ全国でスポーツフェラインは90,802件（2014年）ある。文科省の平成26年度学校基本調査によると、日本の高等学校数が、4,963校、中学校数が10,557校、小学校が20,852校であるから、地域の学校で運動をすることを考える以上に、ドイツにはスポーツフェラインの数が溢れており、身近である事が分かる。

ドイツでは学校教育の一貫としてのスポーツの部活動は原則として行われていない。ドイツにおける青少年のスポーツ活動の核は地域のスポーツフェラインであり、彼らはそこで中高齢者に至るまで週1～2回程度スポーツ活動を実践する。地域のスポーツフェラインへ加入すると、州スポーツ連盟およびドイツオリムピックスポーツ連盟（DOSB：Deutscher Olympischer Sportbund）の会員として登録されると同時に、自分の参加するスポーツ種目の競技連盟へ登録される。登録すると、会員証をもらうが、そこには州スポーツ連盟とDOSBのロゴも印字されている（写真1）。



写真1 左下がハンブルクスポーツ連盟、右下がDOSBのロゴ

### 3. スポーツフェラインの発展と現在

#### (1) ETV Hamburgの歴史

私が所属したETV Hamburgは1889年創立の125年の長い歴史を持つ、ハンブルクで最も大きなフェラインの一つであるため、ドイツのスポーツフェラインの発展を考察するには、十分であると考えられる。ETVとはEimsbütteler Turnverband e.V.の略であり、Eimsbüttel（アイムスビュッテル）というハンブルク中心地からわずかに西部にある一地域のTurnverband（体操クラブ）という意味である。つまり、体操クラブが原点のフェラインである。

1910年に現在のメイン体育館のある場所に、2つの体育館が建設され、当時は体操、サッカー、水泳、フェンシングという種目構成であった（写真2）。大体育館内部では、体操が行われた。体操はドイツでも日本と同様に国威高揚、精神と肉体の鍛錬の道具として使われていた。しかし、第1次世界大戦の時代から、館内にはギャラ



写真2 1910年の体育館



写真3 大体育館内部で行われていた体操

リーを設計し、観客を意識し、人々が集まることや観戦することが考えられていることが、日本と異なるスポーツ文化として成熟していったのだろう。

#### (2) 現在のETV Hamburg

1889年に立ち上げられた当フェラインは、125年の長い時間をかけ、ハンブルクで最も大きなフェラインの一つ

に成長した。現在のフェラインの構成を以下の表にまとめた（表1）。

表1 ETV-Hamburgの構成（2014）

会員数	12,500人（男45% 女55%）																
収入	420万ユーロ/年（5億6700万円）																
内訳	会員費320万ユーロ（4億3200万円） 他団体への賃貸収入・スポンサー収入・寄付の合計100万ユーロ（1億3500万円）																
スタッフ	常勤クラブ幹部15名 非常勤クラブ運営者7名 約500人のコーチやトレーナー																
スポーツ種別	23カテゴリー 40種類 合気道、バドミントン、バレエ、野球、ソフトボール、バスケットボール、アーチェリー、ボクシング、カポエラ、ファウストボール、フェンシング、フィットネス、ヨガ、体操、サッカー、エアロビクス、社交ダンス、ハンドボール、ホッケー、インラインスケート、柔道、カヌー、テコンドー、子どもスポーツ、テニス、卓球、カンフー、アスレティック、健康スポーツ、フロアボール、水球、水泳、空手、バレーボール など																
施設設備	アイムスビュッテルスポーツセンター 室内スポーツ用ホール4 体操用ホール3 柔道場2 ダンスホール1 トレーニングジム1 レストラン1 多目的ルーム1 ビーチバレーコート2 サッカー場2 ソフトボール場1 ホーヘルフトスポーツセンター サッカースタジアム1 テニスコート11 屋内テニスコート3 多目的スポーツホール1 人工芝ホッケー場1 人工芝サッカー場1 タームウェグスイミングスクール プール1 イーゼベックボートハウス ボートハウス1																
会員の世代別内訳 (2014年10月)	<table border="1"> <caption>会員の世代別内訳 (2014年10月)</caption> <thead> <tr> <th>年齢層</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0-6歳</td> <td>13%</td> </tr> <tr> <td>7-14歳</td> <td>22%</td> </tr> <tr> <td>15-18歳</td> <td>6%</td> </tr> <tr> <td>19-26歳</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>27-40歳</td> <td>22%</td> </tr> <tr> <td>41-60歳</td> <td>23%</td> </tr> <tr> <td>61歳以上</td> <td>9%</td> </tr> </tbody> </table>	年齢層	割合	0-6歳	13%	7-14歳	22%	15-18歳	6%	19-26歳	5%	27-40歳	22%	41-60歳	23%	61歳以上	9%
年齢層	割合																
0-6歳	13%																
7-14歳	22%																
15-18歳	6%																
19-26歳	5%																
27-40歳	22%																
41-60歳	23%																
61歳以上	9%																

### ①行われているスポーツの種類

40種類ものスポーツが当フェラインでは行われている。メジャースポーツだけではなく、カポエラやインラインスケートといったマイナースポーツも行われている。会員は行いたいスポーツを登録すると会費を払うことでそのスポーツを楽しむことができる。会費は月々8ユーロから40ユーロとスポーツ種別によって異なる。野球などはボール代がかかる上、ドイツではマイナースポーツなため、会費は高めになってしまう。逆にサッカーは安い会費で参加することができる。

子ども向けの体操教室のようなものから、社交ダンスや健康スポーツなど高齢者向けのスポーツもあるため、会員層も幅広い。会員の世代別内訳を見ると、学齢期の子どもだけではなく、30歳から60歳までが45%を占め、大人になってもスポーツを楽しんでいることが分かる。

### ②施設設備の充実

日本と比べ、施設設備の規模と充実度の違いは一目で分かる。何より日本と異なるのは、カフェレストランではないだろうか。スポーツで汗を流したあとシャワーを浴びて、カフェでお茶をしたり、ビールでのどを潤したりする姿が見られた。もちろん食事もできる。また、エントランス横にあることで、地域の人も利用しやすい。スポーツをしなくても、待ち合わせ場所や散歩中の寄り道としてスポーツクラブが地域に存在することができる。大ホールではバドミントンや体操、ハンドボールなどあらゆる種目が行えるように設計されている。窓ガラスが低い位置にあり、採光や開放感が考えられている。窓ガラスは強化ガラスで作られており、ボールが当たっても割れることはない。野球の冬期練習もこの大ホールで行われ、ソフトボールを使った練習もできる。

社交ダンス場横にはバーも併設されている。ヨーロッパのダンス文化を感じさせる。トレーニングジムは清潔感あふれ、地下にはジム利用者専用の更衣室とシャワーがある。ソフトボール場もあり、外野は人工芝である。ドイツにある数少ないソフトボール場のひとつである。北ドイツにはこのような立派なソフトボール場はここにしかないため、ハンブルクから100kmほど離れたキールという街からETVに練習に来ているソフトボールのメン

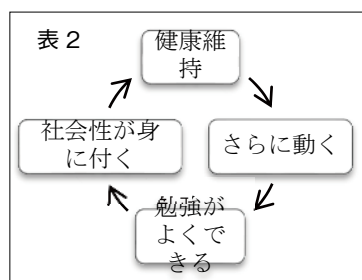
バーもいる。

また、スイミングスクールや川沿いにはボートハウスも所有している。カヌーなど川を利用するスポーツも総合型クラブの1種目になることが、当クラブの大きさを物語っている。

#### 4. スポーツフェラインと教育界との新しい取り組み“KIJU”

2012年からETVが行っている新しい取り組みにKIJU（キユ）と呼ばれるものがある。KIJUとは、ETV Kinder- und Jugendförderungの頭文字で、ETV子ども青少年育成振興会といった訳になる。これは、ドイツの教育事情が大きく影響している。ドイツでは小学生にあたるのは1～4年までであり、5年生からは上級学校に進学する。どちらも午前中授業で遅くとも14時頃には下校となる。そして、午後の時間は、勉強やスポーツ、音楽、芸術など子どもがやりたいことを家庭やフェライン、グループなどに加入して行うのが一般的である。これまでは、母親が引率など育児の範疇で行っていた。しかし、ドイツでも90年代から、女性の社会進出が進み、仕事をもつ母親が増えたり、育児に対する考え方も変化してきて、母親が個人の時間を求めたりして、子どもの午後の時間を一工夫する必要が出てきている。そこに目を付けたのが、KIJUというプロジェクトである。

KIJUは、ETVとは別運営、別経営の形態をとっているが、傘下に入るにあたりパートナーシップを組んでいる。KIJUは表2の考えのもと、学校と連携したプロジェクトである。午後の時間にKIJUが学校に出張し、希望した子どもたちを預かり、スポーツだけでなく宿題や音楽、料理や語学学習をサポートする。KIJUには2013年時点で、教育学を専門に学んだ社員が60人、パートタイムスタッフが50～70人おり、そういったスタッフが各学校に派遣され、学童保育のようにスポーツや宿題、音楽、芸術をサポートする。



プロジェクトはフェラインとの相乗効果により高められており、学校の子どもの才能発掘や能力開発に役立っている。これまで、ドイツの子どもたちは、午後の時間を自分の興味がある分野に時間を費やし能力を高めていたが、KIJUにより午後にも学校のようにカリキュラムの中で、社会性やスポーツや芸術の能力を高める機会を得られるようになった。当初はETVの会員数増加に向けたマーケティング色が強かったようだが、今後はドイツの教育界にとっても大きなプロジェクトになるかもしれない。

#### 5. おわりに

日本でもドイツでもクラブ運営には多くの課題があり、コーチの確保や経営面で同様の悩みがある。それでも、ドイツでは数多くの総合型クラブが成り立っているのは、人々のスポーツに対する思いによるのだと分かった。長い歴史と育んできた文化により、ドイツでは子どものころから「スポーツは気持ちよくなるため（喜びのため）」にやるものという考えが定着している。インタビューしたvan der Laanさんも当然のようにそうおっしゃっていたし、教育とスポーツは別物と熱く語ってくれた。ドイツでも戦時中は教育や国力のためのスポーツだったが、戦後イギリスの影響を受けて、やりたい人がやりたいだけ、（費用をかけて）行うものになった。日本は戦後も少々この時間が長かったので、欧米に比べ遅れている感じがすることもあるが、社会の成熟につれて、確実に欧米のようにスポーツ文化が発展していきだろう。スポーツは、集まる、共有する、飲み食いを楽しむこともできる。そういった感覚でスポーツが存在することができれば、日本でもスポーツクラブが発展していく可能性が生まれるだろう。日本のスポーツ界、子どもたちのために部活動のあり方についても、考えていきたい。